様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３２４２９
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７９２６１８

研究課題名（和文）看護師が日常的に使用している患者評価方法を用いた動物介在プログラムの構築

研究課題名（英文）Establishment of Animal Assistance Program Utilizing Patient Evaluation Methods Routinely Used by Nurses

研究代表者
熊坂　隆行（Kumasaka, Takayuki）

日本保健医療大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：８０３４７３８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　4,200,000円、（間接経費）　1,260,000円

研究成果の概要（和文）：　病院やクリニック、2ヶ所の承諾を得て「動物とのふれあい」を行ない、患者への影響を検証した。フェイススケール調査では、ほとんどの患者がふれあう前より、ふれあった後に「快」の気分を示した。また、患者へのインタビューからは、動物とのふれあいは「大切な時間」「癒やし」であることがわかった。このことから、動物とのふれあいを評価する場合、看護師が日常的に使用している、“スケール調査”“インタビュー”“傾聴”が有効的であると考えられた。

研究成果の概要（英文）：I carried out Animal Interaction in 2 hospitals/clinics after obtaining their consent and investigated its effect on patients. Under the face scale survey, most of the patients showed more cheerful moods after the interaction than before interacting.Furthermore, interviews with the patients indicated that the interactions were valuable time and therapeutic to them. Based on these facts, when evaluating animal interaction, scale surveys, interviews, and attentive listening which nurses routinely use seem to be effective.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：動物介在　看護ケア　入院患者　入院環境　評価システム

１．研究開始当初の背景

わが国の医療は、西洋医学の物理化学的アプローチが中心であり、併せて心理社会的アプローチが統合的に用いられている。その心理社会的アプローチの生物療法の中にペット療法、動物療法、動物介在療法が位置づけられている。この療法は、生き物とのかかわりを利用したもので、基本的生活リズムの回復、情緒的安定、自主性や意欲の向上、社会性の改善、社会生活・生活日常技能の獲得など、患者の自立と適応を高めることを目的とした療法である（樋口輝彦，2004）（坂田三允 1，2005）。

これらの療法は、多くの専門職や協働するチーム医療の中で行うが、療法を行う場合、24 時間、患者の入院環境を整え、患者の状況を把握し、看守っている看護師の役割が非常に大きい。患者の価値観の多様性を理解し、患者の気持ちに寄り添っていくために、それぞれの過去の生活観念に目を向ける必要がある。患者がどのような人物なのかをイメージしていくために、① どのようなことが好きなのか、② どのような趣味や特技をもっているのかなどの情報を集め、それらのことが患者にとって、いかなる意味をもつのかを考えていくべきである（坂田三允 2，2005）。欧米の病院や医療施設では、ペットと面会することや同居を許可する病院が一般的に存在し、動物を介在した治療が盛んに行われ、報告されている。文献データベース「CINAHL」を使用し、キーワード「Pet Therapy」で検索したところ、2005 年 3 月までに 229 件の報告があった。その対象者は、精神疾患の患者、小児、高齢者（特に認知症の高齢者）、障害者、ターミナル期の患者等であり、介在する動物はイヌやネコ、ウマ、イルカ等であり、これらは、医師が動物介在プログラムを計画し、身体的・精神的・社会的な面の向上に用いられている。また、文献データベース「医学中央雑誌」でも同じように検索したところ，2004 年～2009 年で 24 件の報告があり、その対象は、精神疾患患者，高齢者（施設入所者）で、介在する動物はイヌやネコであった。

日本国内の介護・福祉系施設では、ボランティアによる動物との「ふれあい」を目的とした、動物介在活動（Animal Assisted Activity：AAA）が盛んに行われている。しかし、医師の治療プログラムに基づき精神や機能治療を目的とした、動物介在療法（Animal Assisted Therapy：AAT）は、一般的な治療法として用いられない現状にある。

その理由は、① 動物が保有する人獣共通感染症やアレルギーの問題、② ヒトへの攻撃等の事故による損傷の問題、③実際に病院で行った伴侶動物との面会や同居、ふれあい活動の報告が少ないこと、④ 日本における動物介在の活動や治療は獣医療関係の専門家が行っていることが多く、病院スタッフ（AAT を行う場合は特に医師）の理解と技術がないこと、⑤ 患者と病院スタッフに対する動物に関する認識、要望等の調査が行われていないこと、⑥保険適用外の治療行為であるため患者側の経費負担が莫大であり、ボランティア活動に依存せざるを得ないなどの問題点を抱え、普及への道は閉ざされたままである。

私は、動物が好きな患者にとって「動物がいる入院環境を整えること」も看護ケアのひとつであり、基本的生活リズムの回復、情緒的安定、自主性や意欲の向上、社会性の改善、社会生活・生活日常技能の獲得など、患者の自立と適応を高めることに繋がり、それは、生活の質（Quality Of Life；以下、QOL とする）の向上に結びつくと考え、看護独自の業務として、「動物とのふれあい活動」「伴侶動物との面会や同居」を推進してきた。

これまで、第一段階として、

①動物ふれあいの報告が比較的多い介護・福祉関係の施設での動物とのふれあいの要望調査、ふれあい活動、ふれあいによる施設利用者への影響

②病院に入院中の患者に対して、動物とのふれあい、伴侶動物との面会や同居の要望調査を行い、動物とのふれあい、伴侶動物との面会や同居に強い要望があることが明らかとなった。

第二段階として、

①感染症の問題が少ない精神科病院での動物とのふれあい活動

②総合病院緩和ケア病棟における動物とのふれあい活動

を行い、患者に及ぼす効果について検証し、なんらかのプラスの効果を及ぼすことが明らかとなった。

そのふれあい活動の評価は、第一に患者の負担とならないような評価方法を検討してきた。また、なるべく、動物とのふれあい活動以外の要因が関係しないように活動直前・直後に実施できる方法を検討してきた。この「動物がいる入院環境を整えること」という看護ケアを浸透させるためには、ケアする者にとって評価が行いやすく、明確でなければならない。患者の大部分の入院中の日常生活の援助をしているのは看護師であり、動物とのふれあいの要望、伴侶動物との面会や同居の希望があった場合、準備、計画、実施、評価をすることは看護師の役割となることが十分に考えられる。そこで平成 20、21 年度は、病院で看護師が患者の日常生活を測定する評価方法に関する調査を行った。調査を行った病院は、社団法人全国自治体病院協議会会員施設情報データベース（http://www.jmha.or.jp/index.php）を活用し、平成 21 年 8 月 14 日現在で、許可病床数 200 床以上の病院 450 箇所を対象とし、1 施設に 3 通ずつ質問紙を送付した。質問紙の回収率は、1350 通送付し 543 通であった(40.22%)。その結果、患者の日常生活を評価する方法として、大半が「フェイススケール」「長谷川式簡易スケール」日常生活自立

度」の回答であった。また、動物とのふれあいで活用できる評価方法についても、同様の結果が得られた。

＜参考・引用文献＞
坂田三允 1(2005)：精神看護エクスペール 精神看護と関連技法，中山書店，2-155
坂田三允 2(2005)：統合失調症・気分障害をもつ人の生活と看護ケア，中央法規出版，19-167
樋口輝彦(2004)：統合失調症，新興医学出版社，1-52

２．研究の目的

「動物とのふれあい活動」「伴侶動物との面会や同居」という看護ケアを実際に実施し、全国調査で得られた結果に基づき、対象に対し、その対象に応じた評価方法を使用する。その評価方法で効果を検証し、評価方法の信頼性と妥当性を探り、日常生活の援助として、看護師が行ない、看護師が評価する動物介在プログラムを構築することを目的とした。

３．研究の方法

平成 20、21 年度に全国調査を行なった評価方法調査のなかで「動物とのふれあい活動」「伴侶動物との面会や同居」のアプローチに活用できる、それぞれの対象に合った評価方法を検討する。

「動物とのふれあい活動」「伴侶動物との面会や同居」のアプローチを実施し、それぞれの対象に合った評価方法を使用し、患者に及ぼす効果を評価する。

「動物とのふれあい活動」「伴侶動物との面会や同居」のアプローチにおける評価方法の信頼性と妥当性を探る。

(1)実施場所と研究対象

①実施場所

「動物とのふれあい活動」「伴侶動物との面会や同居」が行なわれている病院。

②対象

「動物とのふれあい活動」「伴侶動物との面会や同居」を希望する研究参加の同意の得られた患者。対象者の疾患、性別、年齢等は問わない。

③調査方法(データ収集方法)

カルテより、基本的属性等を収集する。

- 年齢、性別
- 入院期間
- 入院までの経過
- 既往歴の有無及び疾患名
- 入院生活・日常生活動作状況
- バイタルサイン（体温、脈拍数、血圧、呼吸数）

平成 20、21 年度に全国調査を行なった評価方法調査のなかで「動物とのふれあい活動」「伴侶動物との面会や同居」のアプローチに活用できる評価方法を活用し、患者に及ぼす効果を評価する。

４．研究成果

動物が好きな患者にとって「動物がいる入院環境を整えること」も看護ケアのひとつであり、それは基本的生活リズムの回復、情緒的安定、自主性や意欲の向上、社会性の改善、社会生活・生活日常技能の獲得など、患者の自立と適応を高めることに繋がり、QOL の向上に結びつくと考え、看護独自の業務として「動物とのふれあい活動」「伴侶動物との面会や同居」を推進している。

この「動物がいる入院環境を整えること」という看護ケアを浸透させるためには、ケアする者にとって評価が行いやすく、明確でなければならない。患者の大部分の入院中の日常生活の援助をしているのは看護師であり、動物とのふれあいの要望、伴侶動物との面会や同居の希望があった場合、準備、計画、実施、評価をすることは看護師の役割となることが十分に考えられる。

平成 23、24 年度は、病院の治験・倫理委員会の承諾を得られた、岐阜県 A 病院緩和ケア病棟で定期的に「動物とのふれあい活動」を実施し「フェイススケール」で評価を行なった。ほとんどの患者がふれあう前より、ふれあった後に「快」の気分を示した。また、他の病院で「動物とのふれあい活動」「伴侶動物との面会や同居」を行なうための準備を進めた。

平成 24 年度までは 1 施設での実施・評価であったが、平成 25 年度は 2 施設となり、患者への影響・効果を検証した。もう 1 施設は、山梨県にある緩和ケア病棟を有するクリニックであり、病院の許可が得られ、動物とのふれあいにおける影響・効果の調査を開始した。フェイススケール調査では、岐阜県の緩和ケア病棟同様、ほとんどの患者がふれあう前より、ふれあった後に「快」の気分を示した。また、山梨では、インタビューも行ない、インタビューから、患者にとっての動物とのふれあいは「大切な時間」「癒やし」であることがわかった。このことから、動物とのふれあいを評価する場合、看護師が日常的に使用している“スケール調査”“インタビュー”“傾聴”が有効的であると考えられた。

今後も病院において「動物とのふれあい活動」「伴侶動物との面会や同居」のアプローチを実施し、患者に及ぼす効果を検証していく。また、評価方法の信頼性と妥当性を探り、データを整理し、学会発表や研究論文として公表していく予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

① Takayuki Kumasaka, Hideo Masu, Mika Kataoka, Akiko Numao, Changes in Patient Mood through Animal-Assisted Activities in a Palliative Care Unit, International Medical Journal, 査読有, Volume19,Number4, 2012, 373-377

〔学会発表〕（計 2 件）

① 熊坂隆行、片岡三佳、沼尾亜希子、西尾静、山本知枝子、伊藤浩明、升秀夫、イヌとのふれあいによる緩和ケア病棟入院患者の気分の変化、第 3 回世界看護科学学会、2013.10.18、ソウル、韓国

② 西尾静、大嶽恒子、山本知枝子、大津陽子、伊藤浩明、道添敏隆、沼尾亜希子、熊坂隆行、イヌとのふれあいによる緩和ケア病棟入院患者の気分の変化、第 43 回日本看護学会－看護総合－学術集会、2012.8.23-2012.8.24、静岡

〔図書〕（計 2 件）

①熊坂隆行編集、世論時報社、看護学生の卒業研究のためのハンドブック－代替療法と研究分析方法－、2014、232

②熊坂隆行編集、本の泉社、アニマルセラピー　動物介在看護の現状と展開、2012、176

６．研究組織

(1)研究代表者

熊坂　隆行（KUMASAKA TAKAYUKI）
日本保健医療大学・保健医療学部・看護学科・准教授
研究者番号：80347385

(2)連携研究者

升　秀夫（MASU HIDEO）
筑波大学大学院・医学医療系・助教
研究者番号：70190345

片岡　三佳（KATAOKA MIKA）
徳島大学大学院・ヘルスバイオサイエンス研究部・准教授
研究者番号：30279997